

研究主題：主体的に学ぶ児童生徒の育成 ～子供を主語とした授業づくりを通して～

紫波東学園（紫波町立紫波東小学校・紫波町立紫波第二中学校）

校長 内川 千亜希

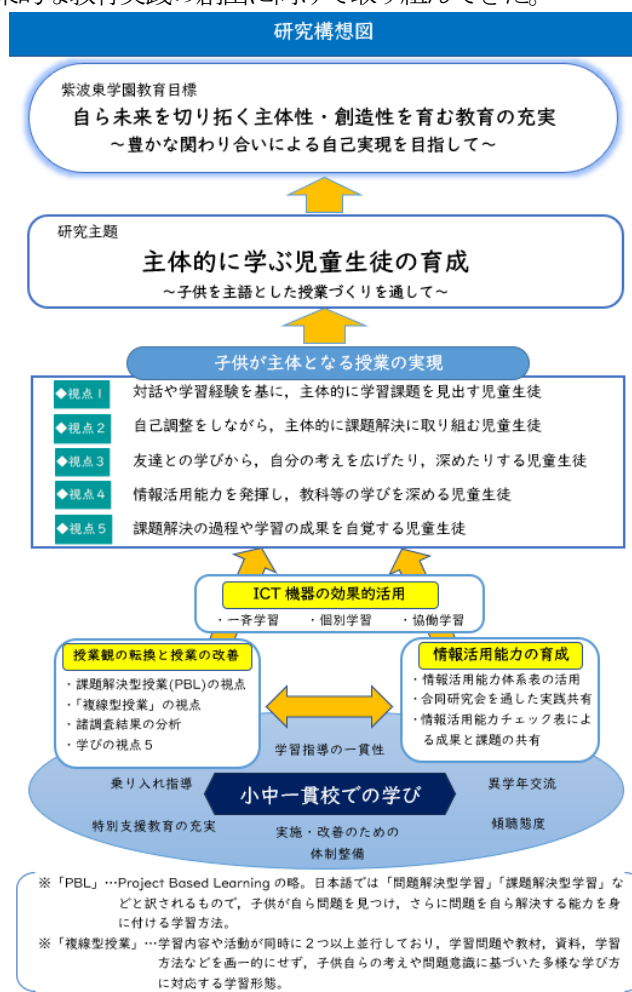
1 研究主題と主題設定の理由

施設一体型小中一貫校 紫波東学園 では、令和5年度より2年間、紫波町教育委員会からの研究指定をいただき、関係各位のご指導のもと、研究実践を進めてきた。また、令和6年度文部科学省のGIGAスクールにおける学びの充実事業「リーディングDXスクール事業」並びに岩手県「教育の情報化推進モデル研究事業」の研究モデル校（地域）の指定をいただき、これまでの研究実践と併せて教育の情報化を推進し、ICTを活用した効果的な教育実践の創出に向けて取り組んできた。

令和3年の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～では、様々な違いをもつ多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていける教育への転換、知識をどう教えるかではなく、子供の学びをどう育てるのかという教師の役割が示されている。予測困難な事態に直面してもたくましく乗り越えていける資質・能力を備えた子供たちを育てる上で、目の前の事象から解決すべき課題を見出し、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことができるような「個別最適な学び」と「協働的な学び」の経験、そして、それらがもたらす「学びに向かう力」は非常に重要なものであり、教師は、指導観や授業観をアップデートしていかなければならない。

現在、学校には、GIGAスクール構想によって整備された一人一台端末や高速大容量のネットワーク環境の日常的な活用の促進と、それに伴う授業や学校の在り方に関する見直しが求められている。一人一台端末の導入により、情報や知識の習得は、学習や問題解決の主体である子供が、自らの判断に基づき、必要になったタイミングで個別最適に行うことができるようになった。子供が自立した学び手となっていくために、情報端末は欠かせないツールとなってきている。

このような背景において、本学園では研究主題を「主体的に学ぶ児童生徒の育成～子供を主語とした授業づくりを通して～」とし、小中一貫校での学びを土台としながら、「授業観の転換と授業の改善」、「情報活用能力の育成」、「ICT機器の効果的な活用」の3つの手立てを通し、子供が主体となる授業の実現を目指して、5つの授業づくりの視点からの授業改善に取り組んできた。ICT機器を効果的に活用し、子供たちにも情報活用能力を自覚させながら育成してきたことや、教師一人一人が「子供を主語とした授業」へと授業改善を図ってきたことで子供たちの学ぶ姿勢にも変化が表れてきている。



2 「5つの授業づくりの視点」からの授業改善

「5つの授業づくりの視点」とは、個別最適な学びや協働的な学び、情報活用能力の育成等に基づく視点であり、授業内容や目標、児童生徒の学習状況に応じて5つの視点の中から重点を決め、授業づくりを進めている。「5つの授業づくりの視点」を児童生徒の発達段階に応じた言葉に置き換え「学びの視点5」【資料1】として、児童生徒と教師で目指す姿を共有しながら学習を進めている。

◆視点1 対話や学習経験を基に、主体的に学習課題を見出す

児童生徒が、自らの気付きや考え、友達や教師との対話、学習経験などから問いを立て、学びを自分事として捉え、必然性のある学習課題を設定していくことで、主体的な学びにつながっていく。児童生徒が、課題解決に向けて自走するための重要なスタートである。



自分が見出した課題を解決するために、改善が必要な点を見つけたり、解決に必要なものを考えたりしている。課題設定からまとめ・表現までのプロセスも学んでいる。

自分の設定した課題が妥当であるかどうか、本当に解決したい課題であるのかを、友達や教師との対話を通して見直している。この時の教師は「教える」ではなく、次への思考を促す「支える」役割に徹している。



◆視点2 自己調整をしながら、主体的に課題解決に取り組む

児童生徒が、自身の学習進度に合わせて計画を見直したり、必要に応じて学習方法を変えたり、自分の考えや学習を評価・改善したりするなど、自ら学習を調整しながら学ぶ個別最適な学びの視点。教師の作成資料、蓄積した自分の考えの振り返り、友達の考えなどを他者参照するなど、児童生徒一人一人が自分の学習状況に合わせて、情報を選択しながら学習を進めることができる環境を整えておくことが必要である。



子供一人一人が、自分の課題解決に向けて、自己調整しながら学んでいる。個別で学ぶか協働で学ぶかは、子供たちが決めている。

児童へのリフレクションより

「根拠」が思い浮かばなかったから、みんなで考えようと思いました。自分では説得力がある文章になっていると思っていても、相手から見ると説得力が足りないことに気がきました。他の人の考えと組み合わせることで、新しい考えが生まれると思います。自分の視点と相手の視点を合わせて意見文を考えられたのがよかったです。

小学校5年児童

◆視点3 友達との学びから、自分の考えを広げ、深める

新たな気付きを得る、妥当性や信頼性を吟味する、自分の考えに生かすなど、よりよい学びを生み出し、考えを広げ、深めていく協働的な学びの視点。協働的な学びは、個別最適な学びと往還させていくことで充実していく。友達に聞いてもらえてよかった、友達の話の聞かせてもらってよかった、という対話体験を積み重ねていくことが大切である。



端末を活用しながら、しっかり相手と向き合って対話をする児童。ICT 機器の活用スキルの向上を図りながら、相手を意識した交流が活動の中で大事にされている。

目的や視点をもって交流したり、課題解決の方法を自分で選択したりしながら学んでいる。個の学習では気付かなかった点や考え直す点を明らかにし、考えを広げ、深めている。



◆視点4 情報活用能力を発揮し、教科等の学びを深める

思考ツールは、「まとめる」「比較・分類する」「表現する」など、目的に応じて選択する。教師から提示するだけでなく、児童生徒が学びに必要なツールとして、自分で判断し、選択できるようにすることも大切である。タイピング等の技能も含め、授業と家庭学習を連動させることでさらなる育成につなげていきたい。



思考ツールは、教科の内容に合わせて「まとめる」「要約する」「比較・分類する」「表現する」など様々な使い方が考えられる。児童生徒の発達段階や学習状況に応じて、自分で判断し、選択できるようにし、教科の学びを深めていく。

情報活用能力は、授業の中だけではなく、家庭学習や夏休みの課題の取組にも生かしている。育まれた情報活用能力を発揮させることにより、児童生徒一人一人の学びの可能性が広がっていく。



◆視点5 課題解決の過程や学習の成果を自覚する

クラウド上に蓄積したもののから「自分の成長や課題を振り返る」「学びのよさや方法を振り返る」「友達からの学びを振り返る」「自分の経験や既習事項と結び付けて振り返る」など、児童生徒は、自身の学びを自覚し、次の学習につなげていく。教師は、振り返りの内容が、次時以降の視点1や視点2にもつながってくることを意識しながら適時・適切なフィードバックをし、授業づくりをしていくことがポイントとなる。

一人一人の生徒の振り返りにコメントを返し、生徒へのフィードバックを大切に授業を進めている。継続することで、生徒の学習意欲の向上、学びへの価値付けにもつなげている。

蓄積した感想やまとめを使い、この単元を通じてどんなことを学んだのかを振り返る。ICT機器を活用し、友達の振り返りを参照することで、振り返りの中身を充実させている。

一人一人の生徒の振り返りにコメントを返し、生徒へのフィードバックを大切に授業を進めている。継続することで、生徒の学習意欲の向上、学びへの価値付けにもつなげている。

蓄積した感想やまとめを使い、この単元を通じてどんなことを学んだのかを振り返る。ICT機器を活用し、友達の振り返りを参照することで、振り返りの中身を充実させている。

3 5つの授業づくりを支える3つの手立て

(1) 情報活用能力の育成

本校では、各教科の目標達成や学びの深まりにつなげていくために、小中9年間の学びの連続性を意識した「情報活用能力体系表」【資料2】を作成し、以下のような活用を目指している。

- 教師が、小中一貫校としての発達段階に応じた育成状況の目安とする。
- 教師が、情報活用能力の育成に関する指導の改善・充実の目安とする。
- 児童生徒が、情報活用能力について振り返り、課題をもつ。

また、児童生徒が自分の課題を把握し、目標をもつことができるように、学期ごとに振り返りを行う「情報活用能力チェック表」を作成している。教師は、「情報活用能力チェック表」を授業改善につなげるために活用している。

(2) 授業観の転換と授業の改善

本校では、下図のように授業観の転換と授業改善を進めてきた。令和4年度には「質より量で使ってみよう」と目標を掲げ、授業や児童会・生徒会活動、学校行事などあらゆる場面でICT機器の活用を進め、教師も児童生徒もICT活用のスキルを高めていった。令和5年度からタブレット端末を有効活用し「教える授業から学びとる授業へ」の転換を図っている。学びとる授業とは、児童生徒が学習方法や内容を自分の判断に基づき、主体的に学んでいくスタイルである。

そのために、本校で取り組んでいる学習形態の一つが「複線型授業」である。「複線型授業」は、学習内容や活動が同時に2つ以上並行しており、学習問題や教材、資料、学習方法などを画一的にせず、子供自らの考えや問題意識に基づいた多様な学び方に対応する学習形態である。さらに、児童生徒が自ら課題を見つけ、その解決に向けて主体的に取り組むことで、問題解決能力や探究心を育成する「PBL (Project Based Learning)」の視点も取り入れながら学習を進めている。

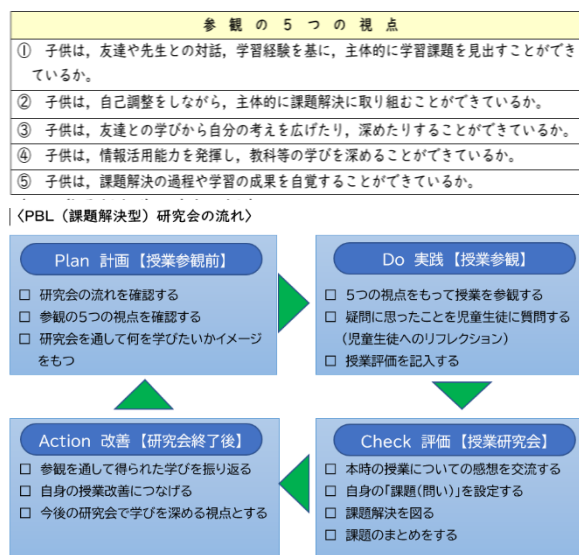
《教師》 学びの伴走者へ 主体的な学びを支える環境整備	令和6年度「主体的に学ぶ児童生徒の育成」	《児童生徒》 自分に最適な学びを選択することができる 学習形態や端末活用の仕方を自分で判断
先進校からの学び 児童生徒主体の授業へと転換の意識	令和5年度「子供を主語とした授業へ」	体系表に基づいた情報活用能力の育成 端末の多様な活用の仕方
ICTを活用した指導の確実な位置付け 汎用的ソフトの使い方を学ぶ	令和4年度「質より量で使ってみよう」	機器活用のスキルを高める 端末活用のルールやマナーを学ぶ

(3) ICT機器の効果的な活用について

文部科学省「教育の情報化に関する手引き」の第4章 教科等の指導におけるICTの活用では、ICTを活用した学習場面を「一斉学習」「個別学習」「協働学習」の3つに分類している。各教科等の特質やICTを活用する利点、児童生徒の実態などを踏まえてICTを活用する場面と活用しない場面を効果的に組み合わせていくことや児童生徒自身が活用の仕方を判断できるようにすることが重要である。

4 課題解決型の校内研究会

本校では、子供たちが主体となる授業を目指しているため、右表のように授業を参観する視点を全て「子供」を主語にしている。この視点は、児童生徒の学びや育ちを評価するものであるとともに、その姿を通して教員自身の指導についても振り返るものである。授業実践を通して、授業者だけが学ぶのではなく、参加する全ての教員が、深めたいと考えた自身の「課題（問い）」をもって研究会に参加し、研究会の協議を通して、「課題（問い）」についての考えを深め、今後の指導に役立てるといった流れを取っている。授業終わりには、学びの主役である子供たち自身が本時の学びをどう捉えているのかを質問するリフレクションを行っている。



5 今後の研究の方向性

取組の結果、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙や自校の「情報活用能力チェック表」において、「学びの視点5」に関わる内容について肯定的回答を選んだ児童生徒の割合は増加しており、児童生徒の意識の変容につながったと考えられる。課題は、以下のとおりである。

(1) 「最適な学び」を判断する力の向上

一人一人が効果的に学習を進めるためには、自身の学習状況を適切に判断し、最適な学びを自己選択・自己判断できる力が必要である。

＜視点1・視点5からの授業改善＞

- ① 教師による適切なフィードバックを行い、学びの自覚を支援する。
- ② 子供が主体的に学習計画の作成や活用に関わることで、課題解決の過程を自覚できるようにする。
- ③ 振り返りの内容の質を高め、次時以降の課題につなげられるようにする。

(2) 情報活用能力のさらなる育成

子供が主体的に情報を活用し、学びを自覚しながら深めることができるような学習環境及び学習場面を充実させていくことが必要である。

＜視点4からの授業改善＞

- ① 情報活用能力の育成の成果を、子供が共有する場面を設定し、意欲付けを図る。
- ② 情報活用能力を駆使して学びを深めるための、クラウド環境を充実させる。
- ③ 情報モラル・情報セキュリティについて、学校全体で取組の改善を図る。

(3) 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

より確かな学びにつなげるために、個別学習と協働学習を往還する授業デザインが必要である。

＜視点2・視点3からの授業改善＞

- ① 内化した知識を外化しながら、知識を構造化・概念化するための対話の充実を図る。
- ② 個別・協働の学びを支え・つなげる教師のファシリテーションの在り方を吟味。
- ③ 個別・協働の学びを支えるために、学習材の収集や開発の充実を図る。

添付資料

【資料1】学びの視点5

学びの視点5	小1・2年用 みつけよう！ 1. 「もっと知りたい」「なぜだろう」 2. がくしゅうのほうほうや すすめかた 3. 「いいな」「まねしたい」 できるようになろう！ 4. しらべる ・ かんがえる ・ つたえる 5. ふりかえり ・ つぎへの みとおし	学びの視点5	小3・4年用 1. 友達や先生との話して「もっと知りたい」、「なぜだろう」を見つけよう。 2. 自分で学習の方法や進め方を考えて学習しよう。 3. 友達の考えのいいなと思う所や、まねしたいなと思う所を見つけよう。 4. 本やタブレットで知りたいことを調べたり、自分の考えを伝えたりできるようになろう。 5. 学んだことを振り返り、次の学習の見通しをもとう。
	小5～中1年用 1. 友達や先生との対話や今まで学んだことを基に自ら課題を見つけよう。 2. 自ら学習の方法や進め方を考えて学習しよう。 3. 友達との学びから、自分の考えを広げ、深めよう。 4. 情報活用能力を発揮し、教科の学びを深めよう。 5. 学んだことを振り返り、次の学習の見通しをもとう。		中2・3年用 1. 友達や先生との対話、学習経験を基に、自ら課題を見つけよう。 2. 自ら学習の方法や進め方を考えて学習しよう。 3. 友達との学びから、自分の考えを広げ、深めよう。 4. 情報活用能力を発揮し、教科の学びを深めよう。 5. 課題解決の過程や学習の成果を振り返り、次の学習の見通しをもとう。

【資料2】情報活用能力体系表

	学習内容	(小) 低学年	(小) 中学年	(小) 高学年・(中) 1年生	(中) 2, 3年生
知識・技能	1 情報と情報技術を適切に活用するための知識と技能	ア タブレット端末の起動や終了、ログイン・ログアウト イ タッチペンを使った手書き入力 ウ カメラ機能を使った写真撮影 エ ファイルの読み込みや保存 オ 「ペイント3D」を使ったお絵描き カ 教材「eライブラリ」の使い方導入	ア インターネット上の情報の閲覧・検索 イ キーボードによる文字の入力（1分間に30～40文字程度） ウ 写真の簡単な編集 エ 文章や表、グラフを作成するソフト、プレゼンテーションソフトの簡単な使い方 オ アンケート機能を使ったアンケートの作成	ア メール等による文字の送受信の仕方 イ キーボードによるローマ字入力（1分間に50～60文字程度） ウ フォルダ作成によるファイルの管理 エ 目的に応じたアプリケーションの選択と操作 オ ビデオ会議ソフトの活用	ア キーボードによる十分な速さで正確なローマ字入力（1分間に60～70文字程度） イ クラウドを用いた協働作業 ウ 目的に応じた適切なアプリケーションの選択と操作 エ 統計的に情報を整理するソフトの使い方
	2 問題解決・探究における情報活用方法の理解	キ 身近なところから様々な情報を収集する方法の理解 ク 簡単な絵や図などを用いた情報整理の方法の理解 ケ 整理してまとめた情報を表現する方法の理解 コ 紙の資料やタブレット端末を活用した簡単な発表の仕方の理解	カ 調査や資料等による基本的な情報の収集の方法の理解 キ 観点を決めた表やグラフを用いた情報の整理の方法の理解 ク 自他の情報を組み合わせて表現する方法の理解 ケ 相手や目的を意識したプレゼンテーションの方法の理解	カ 調査や実験・観察等による情報の収集と検証の方法の理解 キ 目的に応じた表やグラフなどを用いた情報の整理の方法の理解 ク 複数の表現手段を組み合わせて表現する方法の理解 ケ 相手とのやりとりを含む効果的なプレゼンテーションの方法の理解	オ 通信ネットワークなどからの効果的な情報の検索と検証の方法の理解 カ 表やグラフを用いた統計的な情報の整理の方法 キ 目的や意図に応じて、情報を統合して表現する方法の理解 ク webページ、SNS等による発信・交流の方法の理解
	3 情報モラル・情報セキュリティなどについての理解	サ 人の作った物を大切にすることや、他者には伝えられない情報があることへの理解 シ コンピュータを利用する時の基本的なルールへの理解	コ 自分の情報や他人の情報の大切さの理解 サ 生活の中で必要となる基本的な情報セキュリティへの理解	コ 情報に関する自分や他者の権利の理解 サ 情報を守るための方法の理解	ケ 情報に関する個人の権利とその重要性の理解 コ 情報セキュリティ確保のための対策と対応の理解 ※生徒会を通じたルール策定や遵守
思考力・判断力・表現力等	4 問題解決・探究における情報活用方法（プログラミング的思考を含む）	ス 身近な事象から課題を設定する セ 身近なところから情報を集める ソ 身近な資料から情報を取り出し、簡単な絵や図、カードなどを用いて、情報を整理することができる タ 順序に気付けながら、図や絵、写真を整理し、自分の言葉でまとめることができる チ 紙の資料やタブレット端末を活用し、簡単な発表をすることができる ツ 情報活用を振り返り、その良さに気付くことができる テ 問題解決の流れを手順を考えながら表すことができる	シ 日常の事象から課題を設定する ス 調査や資料から情報を収集する セ 調査や資料等から情報を収集し、表やグラフ、シンキングツールなどを使って、情報を整理することができる ソ 情報の全体的な特徴を捉え、要点を整理しながら、事実と自分の考えを分けてまとめることができる タ 相手や目的を意識した表現方法を考え、簡単な発表をすることができる チ 情報活用を振り返り、どのように改善すればよいかを考えることができる ツ 問題解決の手続きを順序、繰り返し、分岐を組み合わせて表すことができる	シ 地域や社会に目に向けて課題を設定する ス 調査や実験・観察等から情報を収集する セ 調査や実験・観察等を組み合わせた情報を収集し、表やグラフ、シンキングツールなどを選択し、目的に応じて情報を整理することができる ソ 問題の解決に必要な情報を観察し、引用したり、実例を挙げたりしながらまとめることができる タ 複数の表現方法を組み合わせ、聞き手とのやり取りをきめて、効果的にプレゼンテーションをすることができる チ 情報活用を振り返り、改善点を論理的に考えることができる ツ 問題解決の手続きを順序、繰り返し、分岐を組み合わせて表し、その評価・改善ができる	サ 現状を把握し、現在の状況や問題点を明らかにしながら課題を設定する シ 目的や状況に応じて情報を収集する ス 目的や状況に応じて統計的に整理し、効果的に情報を整理することができる セ 得た情報を適切に比較したり、分類したりしてこれまでの経験を生かしながら、自分なりの方法でまとめることができる ソ 目的や意図に応じて表現を工夫し、WebページやSNSなどを使って表現・発信、創造する タ 情報活用を振り返り、視点を決めて評価し、改善点を論理的に考えることができる チ 問題解決の手続きを、フローチャート等を用いて表し、その評価・改善ができる
	5 問題解決・探究における情報活用態度 情報モラル・情報セキュリティなどについての態度	ト 課題に関する情報を見つけようとしている ナ 情報の活用を振り返り、よさを見つけようとする ニ 人のつくったものを大切にし、他者に伝えるにいけない情報を守ろうとする ヌ コンピュータを利用する時の基本的なルールを守って活動することができる ネ 情報機器に頼り、進んで利用しようとする	テ 課題に対する情報同士のつながりを見つけようとする ト 自分の情報や他人の情報の大切さを踏まえ、尊重しようとする ナ 個人情報取り扱いに注意したり、相手のことを考えたやりとりをしたりすることができる ニ 情報や情報機器を生活の中にかかそうとする	テ 情報を構造的に理解しようとしている ト 情報に関する自分や他者の権利があることを踏まえ、尊重しようとする ナ 情報に関する個人の権利と、その重要性を尊重しようとする ニ 情報や情報技術によりよい生活や社会づくりに活かそうとしている	ツ 事象を情報とその結び付きの視点から捉えようとする テ 情報に関する個人の権利とその重要性を尊重しようとする ト 社会は互いにルール・法律を守ることで成り立っていることを踏まえ、行動しようとする ナ 情報や情報技術によりよい生活や持続可能な社会の構築に活かそうとする

【実践記録】

実践1 小学校6年道徳「修学旅行の夜」

本実践においては、主人公の気持ちを考える場面でタブレットを用い、自分勝手な行動が周囲にどんな影響をもたらすかを考え、交流を行った。特別な夜だから少しだけならという短絡的な思いと、集団として生活する上での大切な規範意識との葛藤を、目前に迫った自分達の修学旅行と関わらせながら扱った。子供たちに委ねる時間を取り、児童が友達との交流を通して考えたり、個で学びを深めたりすることで、個人の課題を追究することができた。

《実践から》

- ・自己を見つめるための教材に浸らせながら考える時間と、個でじっくり考える時間のバランスをどのようにとるかを探していきたい。
- ・子供の考えが深まるような交流のさせ方についてが今後の課題である。



実践3 小学校4年社会「健康な暮らしとまちづくり」

本単元では、身の回りのゴミ問題について個々が課題をもち、複線型授業を取り入れながら、解決を図る学習を進めた。本時では、単元の蓄積資料や友達への考え、教師の作成資料を「知識データベース」としてクラウドに保存し、自由に情報を取り出しながら学習を進めることができた。友達や教師との対話を通して、自分の課題を見つめ直し、学習したことを生活に生かそうとする意欲をもつことができた。

《実践から》

- ・実生活や実社会にも関わりのある課題を設定し、解決策を考えることで、自ら問題を解決する力を育成する学習になった。
- ・一人一人の自己調整する姿を捉えるために、前時までの振り返りを有効活用していきたい。



実践2 中学校2年理科「化学変化と原子・分子」

本実践は、カルメ焼きが膨らむ現象について、その要因を見出すために、生徒個人が各々の課題を設定し、解決に向けて探究するという複線型の授業であった。探究するチームや探究の方法、結果・考察の記録の仕方等は、生徒が個人で判断した。ICT機器を活用し、実験結果を記録したり、考察結果を生徒間で共有したりすることで、課題に対する理解を深め、知識の幅を広げることができた。

《実践から》

- ・生徒一人一人が必然性のある課題をもって学ぶことで、主体的に課題解決に向かう姿が見られた。
- ・ICT機器を用いた結果・考察の共有は、生徒が個別に考えを深めたり比較したりするのに有効であった。



実践4 中学校1年数学「数の世界を広げよう」

本実践は、正負の数の四則計算において、「計算方法を言葉で説明すること」をねらいとした授業であった。数や演算記号をカードにし、そのカードを用いて、グループで話し合いながら計算式を立てた。問題作成から解答を考えるまでの活動をグループに委ねることで、「なぜこの式だと成り立たないのか」「どのような順序に並び替えると正しい式になるのか」について、意見交流しながら協働的に学ぶことができた。

《実践から》

- ・協働的に学ぶことで、数学に苦手意識をもった生徒も、意欲的に課題に取り組むことができた。
- ・カードのようなアナログの教具とデジタル教具のそれぞれの良さを生かすことで、授業のねらいに迫ることができた。

